

# 416

私たちがやったこと  
未来へ伝えたいこと

平成28年熊本地震  
熊大黒髪避難所運営記録集

STAFF  
熊大祭  
SIGMA FESTIVAL SINCE 2012

# はじめに

## 熊本大学黒髪避難所および本書の概要

2016年4月14日の熊本地震発災後、学生や地域住民が武夫原グラウンド（一時避難場所）へ多数避難。それを受け熊本黒髪体育館を開放したのが始まり。4月16日発災後は最大1,000名以上の避難者を収容。自治体との協議により2016年4月30日正午をもって閉鎖した。

4月14日から18日正午までの4日半は、学生有志が避難所運営の中心的役割を担った。本書は主にこの期間における学生の活動を記録したものである。

## 平成28年熊本地震の概要

平成28年（2016年）4月14日、熊本県熊本地方を震源とするM6.5の地震が発生。震源地の益城町では震度7を計測。熊本市中央区は震度5強。同16日、1回目を超えるM7.3、最大震度7の地震が発生。熊本市中央区は震度6強。熊本黒髪キャンパスでは工学部1号館の損壊（後に建替が決定）、五高記念館の煙突崩落のほか、多数の建物、備品等が損害を受けた。

日本において震度7を計測したのは阪神・淡路大震災（1995年/M7.3）、新潟県中越地震（2004年/M6.8）、東日本大震災（2011年/Mw9.0）に続いて4例目。震度7の地震が短期間で2回起きたのは熊本地震が観測史上<sup>1)</sup>初だった。

県内の死者161名（直接死:50名、震災関連死:111名）、負傷者2,620名<sup>2)</sup>。  
1) 1949年の震度7制定後 2) 消防庁発表、平成28年12月14日時点

## まずは落ち着いてこれを読み！ 緊急時チェックリスト

- ✓ 1番は自分の身を優先にすること！！
- ✓ 身体は無理をしていないか？ 少しでもきつかったら必ず休むこと！！
- ✓ 携帯電話の充電は足りているか？？  
（必要最低限に抑える）
- ✓ 水が確保できるならすぐに確保すべし！
- ✓ 自分一人で頑張るのではなく、周りの人たちと協力して対応すべし！
- ✓ 噂やデマに流されるな！
- ✓ 困ったときこそ人に優しくすべし！

➡ 第2部「組織体制図」（11ページ）も参考にしてください！

# INDEX

第1部 私たちがやったこと①—時間軸に基づいて—	
Phase1 4/14 発災～4/16 発災まで	4
Phase2 4/16 発災～避難所システム化	6
Phase3 忘れられない1日が終わるまで	8
第2部 私たちがやったこと②—避難所での役割—	
組織体制図、避難所の1日	11
運営本部	12
受付	13
物資 / 配給	14
救護	16
外国人対応	18
誘導 / 見回り / 人数カウント	20
情報収集	21
その他	22
【番外編】全学教育棟	24
第3部 未来へ伝えたいこと	
仮想対談「熊本地震、そのとき私は」	26
学生からの提言書	29
付録 避難所運営フォーマット集	30



## 柔道場

体育館に併設されている武道場。奥にある剣道場を含め、100人を超える人が避難生活を送っていました。



熊本大学黒髪体育館 見取図

# 第1部 私たちがやったこと①

時間軸に基づいて

ここでは、主に4月14日発災時から4月16日が終わるまで学生たちがどのような活動を行ったのか、時間軸に沿って解説します。

# 4/14発災～4/16発災まで

時間のめやす 初回発災時から 24 時間

2016年4月14日21時26分、私たちは突然の大きな揺れに襲われました。熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の大地震。ほとんど誰も経験したことのない出来事に不安や恐怖を覚えた学生たちが向かったのは、大学のグラウンドでした。

## Interview 振り返りインタビュー

Q.地震直後の避難者に一番必要の多かった物資は？

地震直後はみんな武夫原のグラウンドに避難してきたため、みなさんが座れるように大量のブルーシートを準備しました。体育館が開放された後は、床の冷たさを和らげるために倉庫の畳や段ボール、そして部活動生が普段練習で使っているマットなども提供してもらいました。私たちが所有しているものをすべて出してくれたにも関わらず、全く足りなかったです。



山崎 実 (やまざき あき) 第57代体育会幹事長。理学部4年。

## 私たちが突然襲った「強震」向かったのは黒髪グラウンド、武夫原

4月14日午後9時26分。4月の入学式等が終わり、学生たちは新歓イベントなどを考えている最中に突然の強震が襲いました。計測された最大震度は7。「まさか、熊本でこんなに大きな地震が起こるなんて」。ほとんどの人が予想しなかった出来事に、混乱と不安に溢れた学生たちが向かった先は黒髪北キャンパスの武夫原グラウンドでした。



## 職員と共に大学の備蓄倉庫から物資を運搬 (4.15 0:00～)

志

### 学生からの主張

- 北キャンパスの備蓄倉庫の鍵が見つからなく開けられなかったのは問題。

Σ 体

## ブルーシートを広げランタン、カイロなどを避難者へ配布 (4.14 22:00～)

### 学生からの主張

- 体育館への誘導が遅かった。
- 誰が職員なのか分からなかった。
- グラウンドでの対応が遅かった。
- 明確な指示があれば良かった。



## Column 4月14日の発災時、あなたは何をしていましたか？

部会の最中でした。新入生歓迎企画も大詰め、企画前の最終確認をしているとき、下から突き上げるような地震がありました。突然の揺れにその場にいたほとんどの人が状況を理解していない様子でした。机の下に隠られた部員はほとんどおらず、最初の大きな揺れが収まるまで何もできません。その後、全員で安全な武夫原グラウンドに避難しました。(生協組織部)

自宅で睡眠をとっていました。身の危険を感じたのですぐに学校に向かい、友人たちと合流して、その晩から先輩の指揮のもと活動を開始しました。(法学部志法会)

一人暮らしのアパートで夕飯を食べていました。すぐに机の下に隠れ、揺れが収まるのを待ちました。経験したことのない大きな揺れで不安しなく一人にいるのが怖かったため、友人と連絡を取り合いました。その際に熊大のグラウンドに多くの人が集まっているとの情報があったので、すぐにグラウンドに向かいました。(紫熊祭実行委員会)

自宅で夕食をとっていました。料理がテーブルから飛んでいったのを覚えています。14日は自宅で寝ましたが、翌朝からオフィスの片付けに追われ、益城町へ被害状況の確認にも行きました。(大学職員)

大学近くで実行委員のメンバーと夜ご飯に行っていました。街でバイトをしていた彼女を迎えに行き、そのあと武夫原グラウンドに避難をしました。実行委員のメンバーが活動していたので、活動に参加しました。(紫熊祭実行委員会)

アパートでSNSをしていました。友達への返信を打っていたまさにその時に揺れが起こりました。テレビの前だったので片手でテレビを抑え、布団を被って身を守りました。その後学科の友人と近くの中学校のグラウンドに避難しました。(ボランティア有志)

研究室で原稿を書いていました。一度自宅に戻りましたが、余震が続くので大学の駐車場と同僚の車の中で車中泊をしました。(地域創生推進機構 安部先生)

Σ 体

## 回収したブルーシートを洗淨、掃除



## 不安を隠せない学生たち 余震は収まりつつ思えたが引き続き体育館を拠点に

ほとんどの学生が初めて体験する大きな地震。この時点では余震も落ち着きはじめていましたが、やはり不安が残る学生も多くいました。そこで体育館を引き続き避難の拠点としました。

## 引き続き体育館を拠点とする (4.15 夕方～)



## 本章の使い方

- ①：平成28年熊本地震における発災からの経過時間 本ページは4月14日発災からの経過時間、次ページ以降は4月16日発災からの経過時間を表しています。実際にどのような時間帯で避難所の形成が行われていったのか把握すると共に、②の時間計算にも役立ててください。
- ②：未来の災害発生時における時刻記入欄 将来、仮に同じような大規模災害が発生し、その直後にこの本が手に取られることがあれば、ボックスの中に発災からそれぞれの時刻を記入し、運営の目安としてください。

## アイコンの見方

- Σ 紫熊祭実行委員会 (大学祭)
- 体 体育会
- 組 熊大生協組織部
- 志 法学部志法会 (学部内サークル)
- ス 教育学部生涯スポーツ福祉課程 (医学部保健学科ほか)
- 救 救護班

# 4/16発災～避難所システム化

時間のめやす 16日発災時から発災後7時間30分程度まで

まさか、もう一度来るとは。

おそらく誰もがこのように感じたでしょう。2016年4月16日1時25分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.3の巨大地震。14日の地震よりも大きいものだったということは、数字を見ずとも体ではっきりと感じられました。

## 誰も予想していなかった「2回目」 体育館待機者も武夫原へ緊急避難

4月16日午前1時25分。これまでの地震観測の歴史を覆す、M7.3の「2回目の強震」が発生しました。前震後に体育館で待機していた避難者も武夫原グラウンドへ緊急避難。各学生団体はLINEなどのSNSで安否確認に追われました。その混乱の中でも続々と避難してくる地域住民の方々の誘導や高齢者・体の不自由な方へのケアを行うなど、率先して行動を行いました。



### 学生からの主張

- ・誰が指揮を取っているのかわからなかった
- ・アドバイスをもらえると良かった
- ・大学にある備蓄の残数がわからなかった → 14日で使っていた
- ・洗面台の水が飲めるのかわからなかった

**組** 「熊大生協災害対策チーム」  
LINE 発足 (4.16 1:35)  
武夫原の見回りを行う

**Σ 体 志 ス**

足腰の弱い方や子連れの方の安全を確保するよう、ブルーシートを設置 (4.16 2:00)

**Σ 体 組**

高齢者や体調が悪い方を優先して体育館へ誘導  
※新体育館は寒く、旧体育館のみ開放した

こうしておけば良かった

- ・学生のために新体育館を早く開けていれば良かった
- ・何人避難所にいたかわからなかったので数を把握できていれば良かった

**志** 学生団体をまとめて本部機能を作ることを提案 (4.16 3:00)

**救** 養護教諭学生1名  
教諭1名が体育館に到着  
救護活動開始

## 本震発生

(4.16 1:25)

地域住民の方を武夫原(グラウンド)から体育館へ誘導開始 (4.16 3:00)

1h35m

熊大生協から飲料等を搬入 (4.16 3:30)

2h05m

学生団体ミーティング① (4.16 4:00)

2h35m

学生団体ミーティング② (4.16 4:50)

3h25m

行政からの支援物資第1便到着 (4.16 6:50)

5h25m

本部設置避難所運営ミーティング③ (4.16 9:00)

7h35m



安部美和 (あべ・みわ)  
熊本大学地域創生推進機構特任助教。博士(地球環境学)。熊本復興支援プロジェクトボランティア活動支援プロジェクトリーダー。専門は地域防災学。

## Interview 本人に聞きました！ 振り返りインタビュー

Q. 避難所に到着したときの感想をお願いします

ー 4月16日の避難所に到着した時には、すでに学生による全体会議が開かれているところでした。体育館の中には多くの方が避難されており、館内には本部席が設けられていましたが受付や負傷者対応など長期戦に備えた動きが必要だと思いました。学生が主導で動いていると聞いて、正直驚きましたが、各団体が統率が取れているようだったこと、体育館が地下水利用だとわかったことで、何となく「これならいける」と感じました。

Q. 役割分担を行ったときに気づいたことを教えてください

ー 特に専門性を必要とする救護や外国人対応には、専門職を目指す学生や留学経験のある学生などメンバーを特定しましたが、それ以外の部署については設置してほしい部署の種類を示すだけで、学生の振り分けは学生団体に委ねました。それぞれの動きについては各リーダーに任せ、情報はすべて本部で集約する形にしました。シフトを組んでもらうこと、引き継ぎをしっかりすること、情報は何でも本部に共有することを徹底してもらい、あとは各リーダーを信じてお任せしました。

旧体育館に放送機器(マイク)を設置 (4.16 6:00)

## バラバラに活動していた各学生団体が初のミーティング

志法会の提案により、それぞれの組織の中で支援活動をしていた各学生団体が体育館に集まり、初めてのミーティングが行われました。そして、紫熊祭実行委員長の衛藤豊くん(教育学部3年)をリーダーに選びました。

## 学生団体だけのミーティング 各団体のシフトが決まる

本震が深夜に起こったこともあり、休みなく働いていた学生には疲れがたまっていました。避難所の運営は長期戦となることが予想されたので、シフト制での運営に切り替え、なるべく休息をとることにしました。(→23ページ)

## 専門家が体育館へ合流 避難所は一気にシステム化へ

不安と混乱、余震の恐怖が入り交差する中、学生だけで運営してきた避難所に心の支えとなるスタッフが合流しました。地域防災が専門の教員をはじめとする大学の教職員です。教職員の合流により、避難所は以下のように一気にシステム化されました。学生たちにとっては大人たちのサポートが得られるようになったことが何より心強いものであったでしょう。

- ・受付・本部の場所など、避難所機能の明確化
- ・分散していた物資を旧体育館へ移動、集約管理
- ・救護ブースの設置
- ・留学生対応ブースの設置

詳しくは第2部を参照



安部先生の指示により、「本部」の看板などが掲げられ、位置が明確になりました

熊大生協からも支援物資が続々と届く

## 本章の使い方

①：平成28年熊本地震における発災からの経過時間

本ページは4月14日発災からの経過時間、次ページ以降は4月16日発災からの経過時間を表しています。実際にどのような時間帯で避難所の形成が行われていったのか把握すると共に、②の時間計算にも役立ててください。

②：未来の災害発生時における時刻記入欄

将来、仮に同じような大規模災害が発生し、その直後にこの本が手に取られることがあれば、ボックスの中に発災からそれぞれの時刻を記入し、運営の目安としてください。

## アイコンの見方

**Σ** 紫熊祭実行委員会 (大学祭)

**体** 体育会

**組** 熊大生協組織部

**志** 法学部志法会 (学部内サークル)

**ス** 教育学部生涯スポーツ福祉課程

**救** 救護班 (医学部保健学科ほか)

避難所のシステム化が行われた後も、問題は山積していました。更なる余震への恐怖。水や食料などの支援物資は足りるのか。ライフラインの復旧はいつ頃になるのか。学生たちは様々な不安を抱えながら1日を終えていきました。

## 初日の配給はたったの「パン半分と250mlの飲料」

このとき、はじめて避難者へ向けた配給を行いました。当時は物資が十分に揃っておらず、配られたのは半分に分けられたパンと2人に1つの500mlのペットボトルのみでした。学生たちがパンの袋を開け、半分にちぎって避難者へ配っていました。



食事の配給場所となった新体育館に通じる廊下。混雑や事故を防ぐため、右側通行のルールを決めました。

## Interview 本人に聞きました！振り返りインタビュー

Q. リーダーとして気をつけたことは？

— 避難所のボランティアに参加してくれている大学生も避難者なので、休息を多めに取ることを意識しました。本震直後は気が張り詰めた状況でのボランティアだったので、休息を十分に取ることができず、体調不良を訴える学生が多く出てしまいました。避難所が軌道に乗り出してから、シフトの人数を最小限に抑え、各人に休息を多く取らせることに重点をおきました。



衛藤 豊 (えとう・ゆたか) 第五回熊祭実行委員会委員長。教育学部3年。

Q. 未来の後輩へメッセージを。

— 普段から、人との繋がりを強く意識して生活してほしいです。私たちは同じ志をもった学生が多くいて、さらに、学生同士何かしらの繋がりが地震の前からあったため、避難所の運営をスムーズに行うことができました。自分がピンチの時に助けてくれるのは友人なので、一人でも多くの友人、知り合いを増やしておくことが大事だと思います。

## 志

全教棟への学生案内の案内図作成・準備  
万が一の水不足に備えて、  
雨水をバケツに貯める準備  
(4.16 14:00)

学生ボランティアも募集開始

体育館内水道の使用許可が出る  
※ただし飲用は不可  
(4.16 13:00)

避難所運営ミーティング④  
生協の食べ物・飲み物配給  
(4.16 12:25)

避難所運営ミーティング⑤  
スタッフ配給  
全学教育棟開放準備開始  
(4.16 14:00)

新体育館開放  
グローバルカレッジ棟開放  
(4.16 15:00)

## 志

全教棟へ学生誘導  
(4.16 18:00)

16日の発災後は地域住民の避難者も増え、体育館は既に飽和状態でした。これ以上の避難者を収容することは困難であったため、一部の学生が全学教育棟へ移動しました。

### 学生からの主張

- ・全学教育棟の受け入れ準備が整ったら避難所運営ボランティアをしている学生に教えてくれるはずだったが、意思疎通が上手くいってなかったため計画が思うように進まなかった (情報共有ができていなかった)
- ・上記のような問題が起こったため、近隣の高校からの熊大生の移動ができなかった

## 組

生協から段ボール搬入  
(4.16 19:00)

この日の夜の予報は無情にも「大雨」  
二次災害に備え万全の体制を期す

4月16日の夜、熊本地方の天気は無情にも大雨の予報でした。ただでさえ地震で地盤が緩んでいる中に大雨が降れば、土砂災害等の二次災害が発生しかねません。学生たちは防災ラジオやスマートフォンで情報収集を進め、万が一の場合に備え体育館の避難経路図を作成。滞りなく誘導できるよう情報共有しました。

避難所運営ミーティング⑥  
(4.16 19:00)

避難所運営ミーティング⑦  
(4.16 21:00)

避難者の希望で、後に22時消灯になりました

避難所消灯  
(4.16 23:00)

## こうして激動の1日は終わる

夜になり、避難者の携帯から幾度となく鳴り響く緊急地震速報の音に怯えながら、長かった一日は終わりました。スタッフは交代で休みましたが、寝付けなかった人が多かったように思います。

## 消灯のしかたにも工夫を

完全に消灯してしまうと真っ暗となり治安上の問題が発生しますが、一部の照明を点けたままにすると真下の避難者が寝付きにくいという難しい問題がありました。体育会の学生が機転をきかせ、旧体育館の入口側1列のみ点灯することで夜も避難者に快適な環境づくりに努めました。また、通路が暗くなってしまう柔道場や剣道場には、体育会が遠歩大会で使用していた電池式のランタンを並べる工夫を行いました。



## 本章の使い方

①：平成28年熊本地震における発災からの経過時間

本ページは4月14日発災からの経過時間、次ページ以降は4月16日発災からの経過時間を表しています。実際にどのような時間帯で避難所の形成が行われていったのか把握すると共に、②の時間計算にも役立ててください。

②：未来の災害発生時における時刻記入欄

将来、仮に同じような大規模災害が発生し、その直後にこの本が手に取られることがあれば、ボックスの中に発災からそれぞれの時刻を記入し、運営の目安としてください。

## アイコンの見方



熊大生協組織部 (大学祭)



体育会



熊大生協組織部



法学部志法会 (学部内サークル)



教育学部生涯スポーツ福祉課程



救護班 (医学部保健学科ほか)



### 更衣室前の水道

4月16日の発災後、熊本市全域で断水が起りましたが、黒髪キャンパスの上水道は井戸水を利用していたため断水は起こりませんでした。

※安全が確認できないため飲用の利用は禁止

## 第2部

### 私たちがやったこと②

避難所での役割

避難所運営を行った学生たちは、それぞれ重要な役割を担っていました。ここでは彼らの活躍を役割別に整理していきます。

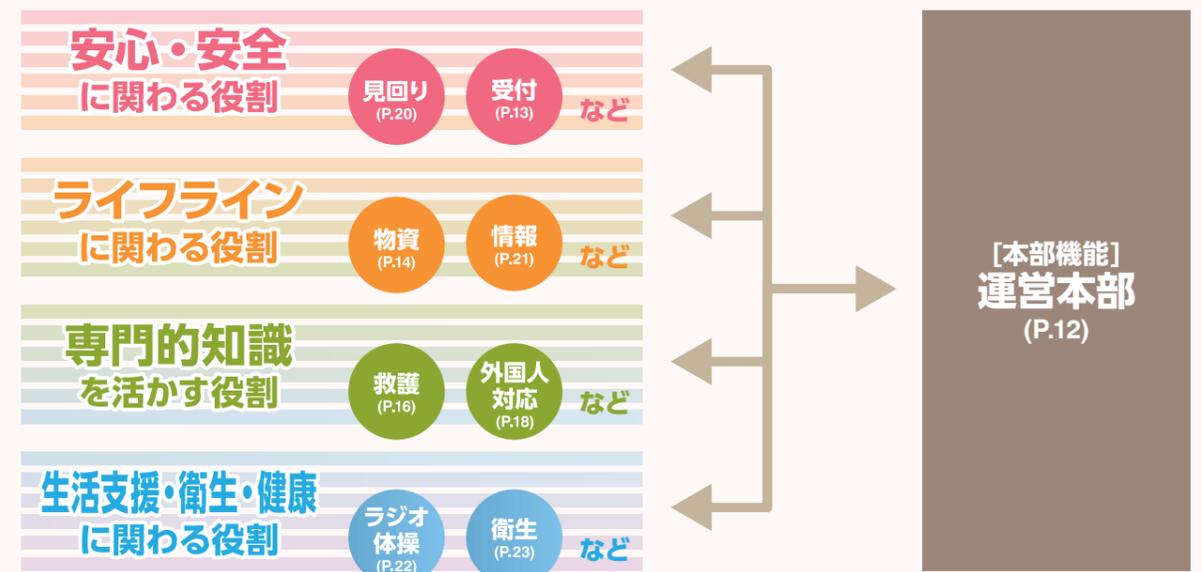


熊本大学黒髪体育館 見取図

## 組織体制図

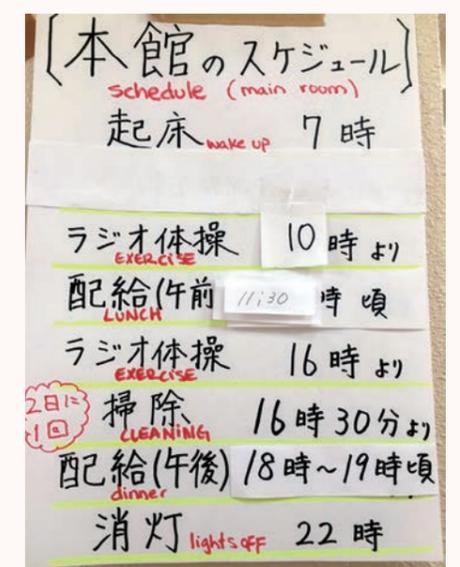
熊大黒髪避難所での組織体制は、4月16日の発災後に設置された運営本部（→7ページ）を中心に、大きく分けて下図の4つの役割を学生が担い、各団体が丸となって自主的に活動を行いました。これだけの幅広い役割を学生が担えたことは、総合大学である熊本大学の強みであり、また普段はあまり交流の無かった団体間でも横の繋がりを意識しながら協力して活動できたことは、学生たちにとっても得られるものが大きかったのではないのでしょうか。

ところで、これは平成28年熊本地震時の黒髪避難所での組織体制図であり、あくまで一例に過ぎません。災害の種類や規模、被害状況などによって、避難者のニーズや熊本大学ができることは大きく変わってきます。将来の大規模災害発生時に避難所運営の参考とされたい方は、是非現場のニーズをしっかりと見聞きし、自分たちがどれだけの力を注げるかをしっかりと話し合っって体制を決めてください。



## 避難所の一日

- 07:00 起床**  
カーテンを開けたり、空気の入替えのため窓を開けて回りました。(当時は4月で肌寒い日もあったので、気候を考慮して)
- 08:00 全体会議(朝)**
- 08:30 館内清掃**  
ボランティアによる館内清掃を行いました。
- 10:00 ラジオ体操①**
- 11:30 昼食の配給**
- 16:00 ラジオ体操②**
- 16:30 館内の掃除**  
午前中に行われるボランティアによる清掃とは別に、避難されている方が自分の周りを清掃する時間を設けました。
- 17:00 全体会議(夕)**
- 18:00 夕食の配給**
- 22:00 消灯**



スケジュールは掲示するほか、配給の時間などは毎日アナウンス放送を行っていました。黒髪キャンパスまたはその周辺で車中泊をしている方が多く、この掲示には車中泊の方々へ特に配給の時間を知らせる大事な役目がありました。

# 運営本部

避難所の運営には欠かせない本部。情報が集まる拠点として、また時には全体会議の場として、大学との連携を取る際にも重要な役割を担いました。

- 紫熊祭実行委員会
- 生協組織部
- 体育会
- 法学部 志法会
- 教育学部生涯スポーツ福祉課程
- 学生ボランティア有志



- 教育学部養護教諭養成課程 / 養護教諭特別別科
- 医学部保健学科看護学専攻

# 受付

体育館の玄関口に設置された受付。避難所への入居、もしくは退去の管理を行うだけでなく、不審者対策にも効果がありました。

- 紫熊祭実行委員会



## 避難所の玄関口として

避難所である体育館の入り口に設置し、避難してきた人がまず目に入るようにしました。物資を持ってくる人やボランティア志願に来る人の対応も行いました。

また、避難所へ取材に来たマスコミ等の初期対応窓口としても活躍しました。(必要に応じて広報戦略室が対応)

## 不審者侵入防止の大事な要

当時は被災地や避難所での窃盗事件が確認されており<sup>1)</sup>、黒髪避難所にも来訪目的が曖昧な県外の方がやってきましたが、受付で侵入を未然に防ぐことができました。

1) 被災地においては、空き家状態となった家屋に侵入し、金品等を窃盗するもの。避難所においては、知り合いが避難しているかもしれないと探すふりをして侵入し、寝ている避難者の財布等を窃盗するもの。当時はSNS等で被害が拡散され、黒髪避難所でも警戒に当たっていました。

## その他、多様なニーズにも対応

避難者の中には、犬や猫、爬虫類といったペットを連れて来た方もいらっしゃいました。黒髪避難所はペットに対応しておらず、体育館の中に入れることができませんでしたので受付で預かるようにしました。

また、黒髪避難所は断水しなかった(第2部扉参照)ので、受付にてポリタンクの貸し出しを行い、避難者が体育館の水を自宅へ持ち帰ることができる環境も整えました。

## やって良かった

- ・誰が避難しているか把握できた。
- ・外部のボランティアも受付をし、学生の負担を軽減できた。

## こうしておけば良かった / 改善点

- ・アレルギーや持病、子どもの数などを把握すべきだった。
- ・引き継ぎのノートを作ればよかった。
- ・誰がどこの体育館にいるか受付で振り分ければ人を探しやすいかった。
- ・避難者やメディア、物資の支援などそれぞれで受付場所を変えた方が良かった。
- ・24時間の受付はかなりきつかった。



紫熊祭実行委員会の黄色のジャンパーが受付の目印でした

## 避難所運営の司令塔

最も避難者数の多い旧体育館に本部を設置し、情報の管理、避難者からの質問、外部からの対応を行いました。本部には24時間常に二人以上配置し、各団体の代表でシフトを組みました。

## 重要事項は全体会議で決定

約3時間ごとに各組織の代表を集め、物資の配給や水の問題、水害時の避難経路など、全体で周知すべき情報を共有しました。地震が起きた直後には学生のみで会議を行っていましたが、4月16日の9時頃に安部先生が来られてから、被災時の専門的な知識も加わりました。



全体会議の様子

## やって良かった

- ・避難者数や物資の数などの避難所において重要な情報が一か所に集中できた。
- ・情報の管理を行っていたため、質問の対応がスムーズだった。
- ・本部と看護の場所が近かったため、けが人をすぐ案内できた。
- ・シフトの交代時に引き継ぎノートを作り、情報をつなげられるようにした。
- ・放送機器を設置して体育館内のアナウンスがよくなった。

## こうしておけば良かった / 改善点

- ・市役所の職員に引き継ぎノートを作ったが、引き継ぎがうまくいかなかった。
- ・情報が本部にまで回ってこないことが多々あった。
- ・災害ボランティア保険に入っておらず、活動に制限があった。
- ・もっと大学側と連携を取るべきだった。

### 紫熊祭実行委員会

#### 本人に聞きました! Interview 振り返りインタビュー

Q. 本部内のコミュニケーションで気をつけたことはありますか?

一本部は受付や物資係などから様々な情報が集まります。しかし本部にはあくまで伝達された情報しかなく、現場にどのような問題が起きているか等を一番よく知っているのは現場にいる人です。だから発生した問題の解決等には自分からもアドバイスをしましたが、実際に現場にいる担当の人の意見を一番重要視することに気をつけていました。また、避難者からの質問やクレームは、答えがわからなくても、一緒に考えるなどして、できる限り避難者に納得してもらえるように気をつけていました。

Q. 後輩へメッセージをお願いします

一予想外の事態が起きても慌てず冷静になってください。起こった事態に対して、今、自分が何をすべきかよく考えて、周りの人たちと協力して行動してください。決して自分一人で行動しないでください。



新垣陽一(あらかき-よういち) 第五回紫熊祭実行委員会副委員長。工学部機械システム工学科3年。

### 紫熊祭実行委員会

#### 本人に聞きました! Interview 振り返りインタビュー

Q. 受付の時に気を付けたことは?

一自分から積極的に声をかけることです。知らない人が大勢いて、ましてや大地震のあとでみんな不安そうだったので少しでも生活しやすいようにと積極的に明るく声をかけるようにしました。

Q. 後輩へメッセージをお願いします

一いつどこで自分が今まで経験していないような困難に出くわすかわからないなと思いました。それでも自分にできることをみんなが少しずつやればきっと何とかなるのでまずは自分から行動するようにしましょう。



一宮愛菜(いちみや-まな) 第五回紫熊祭実行委員。理学部理学科3年。

# 物資/配給

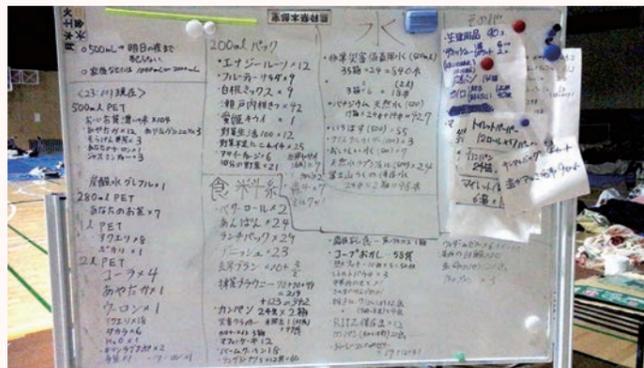
食料、水、生活用品… 発災直後の段階では最も必要としているものを、全国からたくさんの支援が届きはじめて段階では避難所に何がどれだけあるのかをそれぞれ把握し、足りないものを手配する重要な役目を担いました。

- 生協組織部
- 体育会
- 学生ボランティア有志



## 物資の把握 (カウント)

食べ物・飲み物・生活用品等を分類し、「何がいくつあるのか？」を種類・容量ごとに数えました。配給の前後に、常に数を把握しておきました。また、それらを会議の際に本部に報告しました。



カウントの際は 10 人前後  
管理は 1~3 人

### 例 お茶、お水 フォーマット集「物資受入表」も活用!

●●茶	500ml	●本	水	500ml	●本
	1L	●本		1L	●本
	2L	●本		2L	●本
▲▲のお茶	500ml	●本			
	1L	●本			
	2L	●本			

**Point!** 水は調理・生活用水・飲料水と用途は様々なので別に分けておき、最後までとっておく。

## 管理

物資の出入りを常に把握しておき、どこに何があるのか分かる状態にしておきました。また、夜間に毛布の貸し出しなどの管理や、配給を受けておらず取りに来た人に食べ物を差し上げたりしました。

日中常に把握する人  
1~2人

夜間管理はシフト制  
2人 / 2時間

### 学生ボランティア有志

#### 本人に聞きました! Interview 振り返りインタビュー

Q. 物資管理をしていて、これはやってくれたという工夫はありますか?  
一配給の前に「今日の配給は〇〇です」とアナウンスを行いました。一人分の数を決め事前に避難者に伝えることでトラブルが起きないように努めました。ただ後になって思うのはやってくれた工夫よりも「こうしておけばよかった」と思うことのほうが多いということです。特にこの冊子の終わりにある「物資受入表」のようなものがあると便利だと思いました。

Q. この本を読む後輩へ向けてメッセージをお願いします  
一地震は本当にいつ、どこで起きてもおかしくありません。防災バッグを作るなど一人一人が日頃から備えをしておくことが何より大切だと思います。



須藤 哲正 (すどう・てつまさ) 有志ボランティア。文学部 3 年。

## 配給

### 配給の分配方法を考える

物資のカウントしたものをもとに、1人分(または1家族分)の配分を考えました。また、会議の際に物資とともにどれくらい配給できそうか報告・相談しました。

日中常に把握する人  
1~3人



### 例 お茶、お水

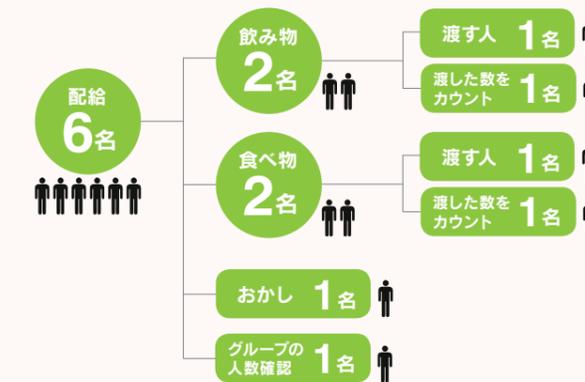
おにぎり	1つ	1人分	飲み物	250ml	1人分
ランチパック	一袋(二つ入り)	2人分		500ml	2人分
デニッシュパン	一袋(6本入り)	3人分		1ℓ	1家族

**Point!** おにぎり1つ=1人分を基準として考えた。飲み物は基本水以外。飲み物は種類に関係なく容量のみで振り分ける。

## 配給の方法

会議で決まった物資を、個人または家族の代表に配る。その際に配給場所に取りにきてもらいました。  
→基本的に6人体制。+配給を手伝う数人。炊き出しの際は、配るものに応じて配置しました。

### 配給時のスタッフ配置例



### 生協組織部

#### 本人に聞きました! Interview 振り返りインタビュー

Q. 物資の分配や配給方法で苦労したことは何ですか?

一物資管理では、その避難所に何があるか、どのくらい残っているのかを常に把握しておく必要がありました。把握する対象は食料品だけに限らず、医薬品や生活用品に至るまで多岐にわたります。しかし、震災発生当初、この避難所には何が必要なのか、運び込まれる箱の中に何が入っているのか、わからない状態で次から次へと届く支援物資をひたすら受け入れていたため、支援物資はあるのにも関わらず、配給することができない麻痺した状態になっていました。そこで一度項目ごとに仕分け、どこに何がいくつあるのか一目で確認できるようホワイトボードに大きくまとめて可視化しました。このようにすることで、ボランティアスタッフの混乱がなくなり配給を開始することができました。何が必要なのか、十分に足りているのかを把握することで、支援物資の要請も円滑にでき、またシフトを交代する際も、スムーズに引き継ぎを行うことができるようになり、結果として負担が軽減しました。

配分計画については、その時の避難されている方の人数だけではなく、その後の人数の変化を本部の方と予測し、受け入れ可能人数を計算して、避難されている方全てに対して同じ量の配給ができるよう心掛けていました。

Q. この本を読む後輩へ向けてメッセージをお願いします

一たくさん遊びましょう! 学生生活でたくさんの経験を積んで、マニュアルだけに縛られず、常に臨機応変に自分で考えて行動できるようになれば、有事の際も冷静に、混乱を少しでも抑えることができると感じました。自分の中で余裕が生まれたら、助けを求めている人たちにも気付くことができるはず! いい加減ですみません。でも僕はそれで何とかできました。



小大塚健次郎 (こおつかけんじろう) 元熊大生協組織部。工学部 社会環境工学科 4 年。

## 熊大生協とのやり取り

生協の職員さんとこまめに連絡: 物資がどれくらい必要か。避難所に何人いるのか。何時に配給を行うのか。  
→基本的に1人。物資の運搬、配給準備などの必要に応じて手伝い数名。

### こうしておけば良かった

- ・職員さんが連絡を取りながら人数把握、物資の状態把握、どれくらい作るか計画するなど大変そうだった。
- 職員さんの近くに連絡係を1人配置する必要あり。

# 救護

震災時の混乱した状況、慣れない避難所生活で、体調の異変を訴える方もたくさんいらっしゃいました。救護で学生が活躍できたのも総合大学である熊本大学の強みです。

教育学部養護教諭養成課程 / 養護教諭特別別科

医学部保健学科看護学専攻

保健センター

法学部 志法会



## 救護室の設置

旧体育館の用具室（救護ブース裏）を救護室として設置し、体調不良者などが体育マットに寝られるよう整えました。また、インフルエンザ等の感染者を隔離するため、体育館入口横の管理室を別室とし、疑いのある方を案内するようにしました。

### 症状の変遷

初期は外傷が多い。その後、頭痛、腰痛、感染症、風邪症状、ストレスが症状として出てきます。検温、血圧測定、希望、湿布の希望、再来が増えます。

## 患者の事例

( )内は当時の対応

4/18 朝	インフルエンザ 1 人目感染 (別室に隔離)
4/18 深夜	精神疾患の疑いのある方：不安、焦燥、興奮気味 (毎晩観察、保健センター医師に相談)
4/19 昼	乳児：異物飲み込み (病院を紹介)
4/19 深夜	トイレに行く際に転倒 (軽症で済む)
4/20 昼	少量の嘔吐 (医師から処方)
4/20 深夜	認知症の疑いのある方、体調不良の方 (この 2 名は救護室での就寝が続く)
4/21 夕方	帰宅願望者 (医師、臨床心理士へ相談後受診)
4/21 夜	左ふくらはぎの痛み痺れで立ち止まる：坐骨神経痛
4/22 夕方	3 回の嘔吐 (ナースが対応し受診)
4/22 夜	男子トイレに嘔吐物 (消毒、ナースへ報告)
4/26 夜	インフルエンザ 2 人目感染
4/27	知的障がいの方

### 保健センター

#### 専門家に聞きました！ Interview 振り返りインタビュー

Q. 避難所での医療支援で気を付けていたことを教えてください。

— 2016 年 4 月はまだインフルエンザが出ている時期でした。たくさんの子供と高齢者が一緒にいる環境下ではあっという間に感染症が広がる可能性があり心配していました。また、自分のマットの上だけで長時間過ごす生活が続くと血栓塞栓症の危険性が高くなること、高齢者では筋力低下が進み移動能力の低下や転倒の危険性が高まることを心配していました。

Q. 救護ボランティアにあたる学生へアドバイスをお願いします。

— 救護ボランティアの学生が、定期的に巡視して保健センター医師・看護師を診察が必要な患者さんのところへ誘導してくれたこと、早めの診療が必要な場合は連絡をくれたことで、診療効率を上げることができました。感染防御や血栓塞栓症予防に有用なトイレ・洗面所での指導や避難者の体操指導をしていたボランティア学生の活動も疾病予防に有効だったと思います。



副島弘文 (そえしまひろふみ)  
熊本大学保健センター長。  
医師、医学博士。

#### 専門家に聞きました！ Interview 振り返りインタビュー

Q. 避難所での医療支援で気を付けていたことを教えてください。

— 体調を確認する際には、看護師であることを伝え、安心してもらえるような声かけを心がけました。急病者に備え、常に受診可能な病院を調べておきました。インフルエンザや感染性胃腸炎などが疑われる場合は、速やかな受診と診断がついた 2 人は保健センターに隔離し、感染症の拡大防止に努めました。

Q. 救護ボランティアにあたる学生へアドバイスをお願いします。

— 学生さん方がシフトを組んで体育館での健康相談受付業務を担当して下さいだったので、2 週間あまりの救護体制が維持できたと感謝しています。皆さんが真摯に取り組む姿は、多くの人の心に響いたと思いますし、近い将来医療に携わる者として貴重な経験になったのではないかと思います。



田代邦子 (たしろ・くにこ)  
熊本大学保健センター。  
看護師。

## やっておいて良かった

- ・避難所開設初期から、観察が必要な方を絞り、カルテを作成して情報をまとめていました。またその方に目印をつけてすぐ対応ができるようにしました。
- ・カルテとは別に引継ぎノートを作り、要観察者や連絡事項について交代時に申し出るようにしました。
- ・血圧測定を兼ねて避難所内を巡回し、避難者の傾聴に努めました。新たに体調が悪くなった人はいないかなど注意するようにしました。
- ・洗面所に歯ブラシを置き、トイレには生理用品を設置して、使いやすいようにしました。避難先での口腔ケアはとても重要なポイントだと実感しました。
- ・嘔吐物の処理方法を共有し、誰でもきちんと処理、対応できるようにしました。
- ・施設の換気を心がけました。
- ・保健センターや通訳ボランティアと連携する体制を整えました、またスタッフは余裕のある人員を確保して、ひとりに負担がかからないようにしました。

## こうしておけば良かった / 改善点

- ・口腔ケアの重要性をもっと周知すべきだった (義歯洗浄剤を使わず何日もつけっぱなしの人がいた、口腔内の清潔を保てないと感染症にかかりやすい)
- ・エコノミー症候群対策は早く行うべき (車いすに座ったままで就寝している方もいた)。マッサージ等、供給があつてからは水分補給も促す。⇒むくみが片側：受診 両側：経過観察
- ・知的障がいの方への対応：精神面のケアと仲良くなることは違う
- ・精神疾患を持つ方への対応 傾聴、共感 情報の共有
- ・インフルエンザ感染者が出てから、マスクを配る、検温を促すなどした。早めの感染予防が必要。
- ・初期は他部門との振り分けが難しく、外のトイレの掃除がされていなかった、どこまでが救護の仕事かが難しかった
- ・掃除などは当番表があればよかった
- ・日が経つにつれ救護の人数を減らしてもよかった、他部門と協力して効率的に運営すべきだった

## 季節に応じた救護ブースの対策

平成 28 年熊本地震は 4 月に発生しましたので、幸いにも重篤な患者は出ませんでした。例えば夏期に発災すれば熱中症や食中毒などに特に神経を使う必要があるでしょうし、冬期に発災すればインフルエンザ等の感染症や高齢者の肺炎などを最大限警戒しなければなりません。医師、看護師など専門家の意見を聞きながら、その時に必要とされる対策や物品を揃えていくようにしてください。

## 救護ブースに必要と思われる物品

血圧計	手指消毒	マスク
体温計	嘔吐後の処理用消毒	爪切り
絆創膏	(保健センター管理のもと)	ビニール袋
湿布	ティッシュ	紙コップ
内服薬	氷嚢、冷えピタ	清拭シート
(風邪薬、胃薬、鎮痛剤など)	入れ歯洗浄剤	懐中電灯
創部消毒液	歯ブラシ、歯磨き粉	筆記用具
綿棒	生理用品	近隣病院の連絡先、住所、
包帯、ガーゼ	おむつ、お尻拭き	地図

### 医学部保健学科看護学専攻

#### 本人に聞きました！ Interview 振り返りインタビュー

Q. もしもまた避難所対応をしたら何が一番気をつけますか？

— 救護として対応するのであれば、やはり避難者の健康状態に気をつけたいです。対応が後手になってしまったという反省もできましたし、ストレス要因の多い環境で声かけが大切だとも感じました。もちろんボランティア側にも気を配れるようにしたいですね。

Q. 後輩へメッセージをお願いします

— 普段はなかなか無い交流があり、学ぶことも多く良い経験になりました。それと同時に周りの人、一人ひとりの力の大きさを再確認しました。無理をしない程度にボランティアをしてみるのも良いと思います!!

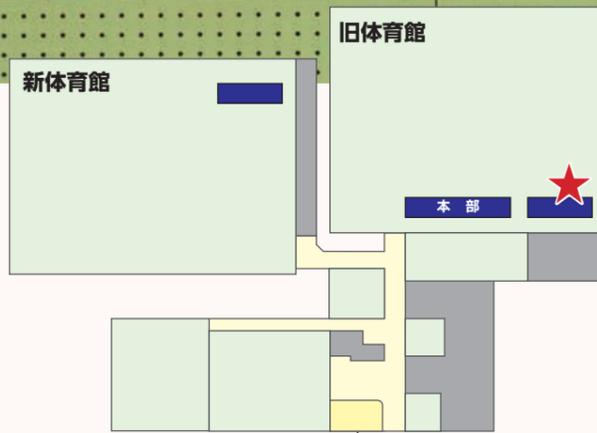


宮城育穂 (みやぎ・いくほ)  
医学部保健学科看護学専攻  
3 年。

# 外国人対応

世界へ羽ばたくグローバル大学として、熊本大学はたくさんの留学生を抱えています。避難所では彼らへのケアも重要になってきますが、その時に活躍したのが英語が得意な学生と、避難していた留学生たちでした。

- 紫熊祭実行委員会
- 生協組織部
- 学生ボランティア有志 (留学生含む)



## 外国人からの質問に回答

Q. 熊本から離れることはできるか？ / 交通情報はどうなっているのか？ / 留学生の寮に戻ることはできるか？ / 配給の時間はいつなのか？ / 救援物資を届けにきたがどうすればよいか？

**Point!** インターネットでの情報収集や本部との相談結果をもとに回答を行った。震災直後は混乱しているので不用意に移動しない方が良いと思われる。

## 本部が全体放送したことを英語で全体放送

配給や消灯等の館内放送は当初日本語のみで行われたため、日本語が理解できない留学生から「今の放送は何と言っていたんだ」という問い合わせが殺到しました。

そこで、日本語の放送の後に英語で同じ内容の放送を行うことで、留学生等に対してもスムーズに情報伝達を行えるようにしました。

体育館に避難していた外国人は以下の 19 カ国  
 アフガニスタン / アメリカ / イラン / インド / インドネシア / カナダ / カンボジア / スロバキア / ドイツ / トルコ / ネパール / フィリピン / ブラジル / フランス / ベトナム / ポーランド / 韓国 / 台湾 / 中国  
 ※運営本部把握分

## 大使館情報 / 交通情報 / 気象情報などの収集 (21 ページ「情報収集」も参照)

旧体育館内のみで最大で 19 カ国 (⇒前項参照) の人々が避難していたため、何か大使館から情報が出ていないかを各国の大使館の HP と Facebook から検索しました。また、ネット環境のない外国人に少しでも情報を与えようと、外国人本部前にホワイトボードに情報を書き込み、随時更新しました。

ブース前に英語で掲示

生協組織部

### Interview 本人に聞きました！ 振り返りインタビュー

Q. 外国人への対応で気づいたことはありますか？  
 -外国人の中には家族連れの方もおられたので、他の避難者への精神的なストレスを増やさないように、子供が夜中泣いてしまった場合は他の場所であやすようお願いしました。質問に答える時も、ただ答えるだけでなく、なるべくコミュニケーションを取るなどして、不安を少しでも取り除こうとしました。

Q. 後輩へメッセージをお願いします  
 -日常生活ではなかなか英語を使う機会がないと思いますが、簡単な英語でも大丈夫なのでとあえず話してみることが大事だと思います。異国の地からやってきて不安なことだらけなのに、震災に遭ってさらに不安が多くなっている外国人の方には積極的にコミュニケーションを取ったほうがいいと思います。しかし、自分も被災者ってことを忘れずに、「無理をせずにできる範囲でやれること」をやっていくてください。

新垣匠 (あらかき・たくみ)  
 熊大生協組織部。文学部歴史学科 3 年。



## ハラール対応



その後、大使館からハラール対応の物資が送られてきました。

4 月 16 日の発災から数日後、宗教上の理由でハラールフードしか食べられない外国人が大学の寮からハラールの食材があるため、それらを使って武夫原グラウンドにテントを建てて調理してもよいかという質問を受けた。本部との協議の結果、自己責任でやっていただくという結果に至った。また、ハラール食材に関しては、大学寮のものだけでなく、福岡からハラール食材を含んだ支援物資が届いていたため、それらも自己責任で使用させた。

## こうしておけば良かった

### Wi-Fi (無線 LAN)

主に留学生になるが携帯を所持している人が少なく、外国人が得られる情報が学生による情報開示のみになっていたため、不安そうな顔が見受けられました。  
 ※後に携帯電話各社からの提供により、無償の緊急災害時無線 LAN [00000JAPAN] を配備

### 大使館情報の入手先

検索するためかなりの時間を有したため、このサイトから調べると確実というのがわかればよい。  
 (⇒ 21 ページ「情報収集の参考となるサイト」を参照)

### 留学生がどこから来ているのかの把握

各国のリストをつくるために避難している留学生一人一人の出身地を聞いて回りました。  
 プライバシーに関わるかもしれないが、熊大留学生の出身国リスト (名簿) があればもっと効率的にできたと思います。

### 救護班・本部との連携のマニュアル

震災で怪我した人、また家族連れで避難してる外国人が見受けられ、幼児が深夜帯に泣き出し、困惑したためその場合はどうするか、また本部との連携が取れず動き外国人にどう伝えればいいのかわからない場面も多々見られたので、最低限こういときはこう対応するというマニュアルがあれば動きやすい。

### 救護班・本部との連携のマニュアル

幼児がいる家族の負担を減らすために遊び道具などあれば、学生と一緒に昼間だけでもストレスの発散の時間にあてられるのではないのでしょうか。  
 ※後に近隣保育所からの支援により、新体育館の一角にブレイルームを開設

### 避難者からの声 (留学生)



Chitla Naga Raja Santhoshini  
 大学院自然科学研究科博士後期課程。

Dr. Raju Aedla  
 大学院自然科学研究科 PD。母国インドの National Institute of Technology Karnataka にて教鞭をとる。

## Interview 本人に聞きました！ 振り返りインタビュー

### Q. 黒髪避難所でありがたかったことは何ですか？

まずは医療体制です。夜中家族が急に具合が悪くなったときも保健センターが対応してくれました。また、就寝時間中に寝ないでみんなの安全をずっと確認してくれている人たちがいた\*ことでも安心してできました。一今まで話をしたことがなかった近所の人や、留学生など色々な知り合いができました。はじめの 2,3 日は緊張や不安が大きかったが、徐々にこの環境を楽しむことができました。今回の避難所生活で知り合った留学生とは今も仲良くしています。  
 -ラジオ体操はとても新鮮な体験で、私たちは避難所で初めてこの体操を知りました。体を動かせる時間があるのはとても良かったし、日本人の避難者と一緒に運動できたことはとても良かったです。

### Q. では、逆に困ったことは何ですか？

一地震の直後は情報が何もなく、熊大に避難していいかも分からなかったため近くの中学校へ避難しました。後に熊大が避難所となったことを知り、受付で受け入れてもらえるか確認した後で移動しました。一炊き出しのカレーは美味しそうでしたが、中に何が入っているか分からなかった (宗教上の問題から) 食べることができませんでした。その間はパンやお菓子、米などを食べていたので、ハラールの支援物資をもらうまでは食べるものに苦労しました。

\* (補足) 防犯や緊急時の素早い対応を目的として、避難所運営にあたった学生や市役所職員等がローテーションで本部で待機 (→ 12 ページ)。担当となった学生は仮眠を取りながら当番を続けました。

# 誘導 / 見回り / 人数カウント

黒髪キャンパスの安全・安心を守る役目として、学生たちは様々な場面で活躍しました。

- 紫熊祭実行委員会
- 体育会
- 生協組織部
- 法学部 志法会
- 教育学部生涯スポーツ福祉課程



# 情報収集

特に発災直後は情報がほとんど入ってこず、避難者は不安な時間を過ごしていました。日々変化する情報、それをできるだけ正確に把握し、伝えることが避難者の安心に繋がりました。

- 生協組織部
- 学生ボランティア有志



本部でラジオや携帯電話で情報を集め、警報が出たら報告。地震の記録。また、余裕があれば交通状態などを把握しました。

## 使用したメディア例

- ラジオ:** NHK
- 気象情報:** 気象庁、Yahoo! 天気、Yahoo! 防災アプリ (インターネット) 大雨による河川の氾濫、ダムの決壊、津波などを警戒し、4/16の夜から開始。→翌日に大雨等の心配がなくなり廃止。
- 交通情報:** 九州産交、JR 九州、阿蘇くまもと空港 など (インターネット)
- 自治体:** 自治体ホームページ (インターネット)
- 留学生対応:** 大使館ホームページ (インターネット)

## Data 情報収集の参考となるサイト

気象庁	<a href="http://www.jma.go.jp/jma/index.html">http://www.jma.go.jp/jma/index.html</a>
Yahoo! 天気	<a href="http://weather.yahoo.co.jp/weather/">http://weather.yahoo.co.jp/weather/</a>
九州産交	<a href="http://www.kyusanko.co.jp/">http://www.kyusanko.co.jp/</a>
JR 九州	<a href="http://www.jrkyushu.co.jp/">http://www.jrkyushu.co.jp/</a>
阿蘇くまもと空港	<a href="http://www.kmj-ab.co.jp/">http://www.kmj-ab.co.jp/</a>
熊本市	<a href="http://www.city.kumamoto.jp/">http://www.city.kumamoto.jp/</a>
熊本県	<a href="http://www.pref.kumamoto.jp/Default.aspx">http://www.pref.kumamoto.jp/Default.aspx</a>
駐日外国公館一覧 (外務省)	<a href="http://www.mofa.go.jp/mofaj/link/embassy/">http://www.mofa.go.jp/mofaj/link/embassy/</a>

※上記 URL は平成 29 年 3 月時点のもので、変更される可能性があります。

## 主な誘導

- 4/16 発災直後 グラウンドから体育館へ高齢者・体が不自由な方・外国の方・子供を優先して誘導。(生協組織部、体育会、スポ福)
- 4/16 14:00 頃～ 学生を全学教育棟へ誘導した。(志法会 / → 24 ページ)

## 見回り

発災直後、広大なキャンパスに避難して来た方の中には、どこに行ったらよいか迷っている方もいました。学生たちはキャンパス内を回り、困っている方をグラウンドや避難所へ誘導していきました。また、避難所の中でも変わったようすがないか定期的に巡回を行いました。

## 人数カウント

黒髪避難所の避難者数を把握するため、1日3回(朝/昼/夜の配給前後)黒髪避難所の部屋ごと(旧体育館、新体育館、柔道場、剣道場)の避難者を数えました。避難者数は本部のホワイトボードに掲示し、スタッフがいつでも確認できるのと同時に、市の災害対策本部への報告にも使われました。また、避難者のうち体の不自由な方などの数も同時にカウントしましたが、プライバシー等に配慮し掲示は行いませんでした。



## 法学部 志法会

### Interview 本人に聞きました! 振り返りインタビュー

Q. 見回りするときに一番気をつけていたことは何ですか?

→避難者の方はとても気が動転しているでしょうし、慣れない生活で身も心もすり減っているようでしたので、とにかく安心して頂くように心掛けて接しました。また、ご年配の方や日本語が通じない外国の方への対応には苦戦しましたが、丁寧さを意識しながら、時には仲間の手を借りながら、何とかやりきることができました。



高瀬大丞 (たかせ・だいすけ) 法学部志法会元副会長。法学部法学科 4 年。

Q. 後輩へメッセージをお願いします

→あなたが今回のような状況でボランティア活動を行うとき、忘れていてほしいのは「あなた方も被災者」だということです。正義感に燃えるのは素晴らしいことですが、それで無理をしようとする逆迷惑がかかります。チームワークを大切に、やれることを一つずつこなしていってください。



集めた情報は館内ロビーに掲示されました。

## 生協組織部

### Interview 本人に聞きました! 振り返りインタビュー

Q. 情報収集を行う上で困ったことはありますか?

→特に困ったことはありませんでしたが、情報収集にはやはりネット環境などがしっかり整備されていることが大事なことだと思います。私が避難所の本部で情報収集をしている時は自分のケータイで交通機関のHPを見たりしていましたが、災害時の無料 Wi-Fi『00000JAPAN』が通っていたので、助かりました。



横矢 萌 (よこや・もえ) 熊大生協組織部。工学部社会環境工学科 2 年。

Q. 集めた情報を提供する際に工夫したことはありますか?

→本部に、主に交通機関などについて尋ねてくる人への対応をしていたときに、口頭や自分でメモをとった紙を見せながらの対応でしたが、その際はできるだけ細かく、例えば、高速バスについて聞いてきた人には、同じ方面に電車が走っていればその案内も付け加えるなど、補足して説明をするように心掛けました。

# その他

## ラジオ体操

避難所での狭いスペースでは体を満足に動かせていないと思われる避難者も多く見られました。平成28年熊本地震では、車中泊を続けていた被災者が血栓塞栓症<sup>\*</sup>、俗に言う「エコノミークラス症候群」に起因して重篤又は死亡した例（震災関連死）が発生し、社会問題となっていました。

そこで黒髪避難所では、教育学部生涯スポーツ福祉課程の学生が中心となり、1日に1～2回、避難者と共にラジオ体操を行うことで運動不足やストレスの解消に重要な役割を担っていました。体の悪い避難者に向けて「イスに座ったラジオ体操」を同時に行い、誰でも無理なく体を動かすことができました。

また、避難者の中には留学生も多数含まれていましたが、教育学部生涯スポーツ福祉課程の学生が見本を見せることで、最初は不安そうにしていた留学生たちも次第にラジオ体操ができるようになりました（→19ページ「留学生インタビュー」）。

※**血栓塞栓症**：下肢や上腕その他の静脈（大腿静脈など）に血栓（凝固した血のかたまり）が生じ、静脈での狭窄・閉塞・炎症が生ずる疾患<sup>1)</sup>。重篤な場合は死に至ることがある。

1) Wikipedia「静脈血栓塞栓症」<http://ja.wikipedia.org/wiki/静脈血栓塞栓症/>

### 教育学部生涯スポーツ福祉課程

#### 本人に聞きました！ 振り返りインタビュー

Q. 避難者を飽きさせないために工夫したことはありますか？

→毎日ラジオ体操をしに体育館に行った際に、避難者の方と積極的に会話をしたり、元気に挨拶をしたりするように心掛けていました。また、留学生の避難者の方たちはラジオ体操を知らない人もいたので、ぜひ一緒にしましょうとお誘いして避難所全体が和やかな雰囲気になってくれるように心掛けていました。



甲斐圭佑（かい・けいすけ）  
教育学部生涯スポーツ福祉課程3年。

Q. 集めた情報を提供する際に工夫したことはありますか？

→今回の震災でみんな一人ひとりが多くのことを感じ、学んだと思います。今回被災した後輩には、そのことをこれからも忘れないでほしいです。そして、被災した人も、そうでない人も、何か普段の生活の中でホントに小さなことでもいいので、何か人のためになるようなことをしたり、困っている人に手を差し伸べてみたいと思っています。



旧体育館でのラジオ体操のようす。カメラ側を向いて見本を見せているのがスボ福の学生たち（写真提供：熊大通信）

## 子どもの遊び相手

・避難者は地域の家族連れの方が多かったため、子どもも多くいました。子どもは避難所にもじっとできずに遊びだして両親が面倒を見切れないうことが多かったため、大学生と一緒に遊ぶ、一緒にゴミ拾いボランティアなどをしました。  
・また夜泣きがひどい子どももいたため、保護者の方を休ませるために少しだけ子どもを預かるなどの対応も行いました。

### ■ やっておいで良かった

・体育会が組織で所有しているボールやグローブなどを避難している方々に貸していたため、遊び道具が多くあった。他の学生も家から道具を持ってきて室内で遊ぶ道具（トランプ、パズル等）もそろった。

### ■ こうしておけば良かった

・受付にいる人にも遊んでほしいとせがんでいて対応が大変だった。  
・かなり疲れるため、交代して遊べよかったです。  
・熊大の避難所にいない子ども達も、大学生が遊んでくれるということを聞きつけて熊大に遊びに来ていた。  
・雨天時は屋内でしか遊べないため、静かに過ごしたい方のためにも騒いでも大丈夫な場所を確保すべきだった。

## 絵画 / 音楽などのレクリエーション

・避難者のストレス軽減等を目的として、教育学部の教員が提案し、日中にクラシック音楽を流すようにしました。クラシック音楽には免疫力の強化などにも効果があるため、特に体調を崩しがちな避難所生活での健康維持も期待されました。  
・教育学部美術科の教員が画用紙やクレヨンなどの絵画セットを黒髪避難所へ寄附し、子どもたちの遊びの時間を作ることで、不安やストレスを少しでも取り除く機会を提供しました。この絵画セットは後にプレイルーム（→19ページ）でも多めに活躍し、壁には子どもたちの描いた多くの絵が飾られました。

## 衛生

・多くの人が体育館で生活することで、普段よりもはるかに多くのゴミが出ました。体育館にある既存のゴミ箱では全く足りないほどの量だったので、新しいゴミ箱を設置しました。また、トイレや水場なども清掃を行うなどしました。  
・ゴミ箱は大きめの段ボールを組み立てて使用したり、紫熊祭で使用している90ℓの大きなバケツなどを使用しました。また、ゴミ箱に取り付けるゴミ袋は、紫熊祭の余りや、紫熊祭実行委員会体育会などが保有しているものを利用しました。  
・体育館のトイレ清掃は、通常、熊本大学が清掃会社に委託していたらしいのですが、地震の際には清掃会社の方も来ることができなくなったため、自分たちで清掃を行いました。トイレットペーパーは紫熊祭で使用したものの余りを使い、足りなくなったら近くのお店に買いに行きました<sup>\*</sup>。\*各学生団体が使用/購入した消耗品は、後ほど大学から物品支給されました。

### ■ 黒髪避難所が誇れる「ゴミ分別」

黒髪避難所に置かれたゴミ箱のほとんどは、右図のようにゴミの種類別にラベルをつけて分別を行っていました。また、避難所生活で大量に消費されたカップ麺類やパック飲料の残りを燃えるゴミと一緒に捨てることのないように、「飲み残し」を入れる缶を別に設置しました。缶の上部には三角コーナーのネットを取り付けましたが、これはスープの残りカスを濾過することで、飲み残しを後にトイレへ廃棄する際、トイレの詰まりを防止する目的がありました。



体育館の廊下に置かれた種類ごとに分けられたゴミ箱  
一番左が「飲み残し」用の缶

非常事態においてもこのような徹底した分別を行うことで、清掃にあたる業者やゴミを廃棄する際の労力が軽減されたことは言うまでもありません。学生が自主的に発案し、避難者もこのルールに従って行動したことは、後に黒髪避難所の最も評価される点の1つとして紹介されています。

### ■ やっておいで良かった

・避難者が清掃を手伝ってくれる時もありました。清掃は頻繁に行わなければならなかったのですが、運営する側も疲れていたため、避難者に手伝っていただくととても嬉しかったです。避難者みんなで避難所を運営することが一番良いと思いました。  
・ゴミ箱を人目の付きやすい場所に設置しました（右上写真）。そうすることで、ゴミが一杯になった際には誰かが気づいて片づけてくれました。

### ■ こうしておけば良かった

・トイレ清掃などの簡単なことは、避難している人にも協力してもらった方が良かったと思います。運営する側が疲れている時もあったし、運営側がいなくなったら清掃する人が誰もいなくなるような状況であってはいけないと思いました。

## ボランティア休憩所の設置、休息の重要性

『できることをしよう』と思い、集った学生ボランティア。学生たちも同じ被災者として、ストレスを抱えながらもボランティアをしていました。その負担軽減のため、初期段階から作業のシフト制を導入し、一般の避難者とは隔たったところに休息スペースを設けました。学生ボランティアも安心して休むことができ、次の作業に備えられました。

避難所の運営はあくまでボランティアであり、自分を犠牲にしてまで仕事にあたる必要はまったくありません。非常事態のボランティアでもっとも重要な仕事の1つは「休むこと」です。ちよつときつい今日は体調が悪いな、と思ったらすぐに友達などに相談しましょう。そして、きついときは「休みます」と言える勇気、周りが「休みます」と気軽に言えるような環境づくりを心がけましょう。



# 全学教育棟への誘導

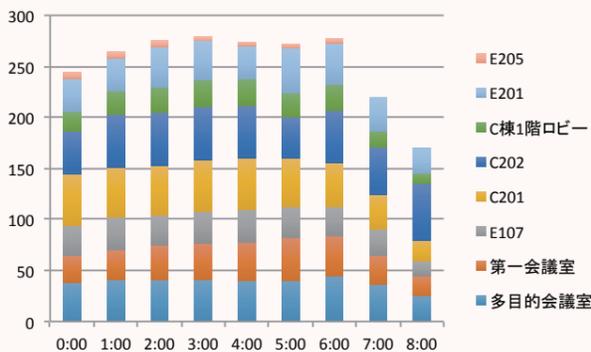
法学部 志法会

## 誘導におけるボランティアの各役割

志法会員のうちボランティアとして活動する意思のある者は、体育館の志法会スペースに待機し、70～90分毎に4人1組で全教棟に派遣。全教棟内の巡回及び避難者数の集計にあたりました。8:00の食料物資の配給の際には増員して各教室等を担当してもらいました。

ボランティア本部に志願してくれたボランティア有志のうち16名を、各教室等に2名ずつ配置し、4月17日0:00を始点として8:00まで1時間毎に避難者数の集計をして頂きました。全教棟に派遣された志法会員と同様に、8:00の配給時にも協力して頂きました。

全学教育棟の学生避難者数 (4/17 0:00～8:00)



## 食料物資の割り振り

食料物資数

飲料	
200ml パック	計 72 本 (6 種類)
500ml ペットボトル	計 65 本 (1 種類)
1000ml パック	計 16 本 (4 種類)
2000ml ペットボトル	計 2 本 (2 種類)
食料	
菓子 (個包装)	計 68 個 (4 種類)
菓子 (袋)	計 15 個 (7 種類)
パン	計 142 個 (5 種類)

7:00時点での各教室等の避難者数の割合に応じて、飲料・菓子類・パンをそれぞれできるだけ同じ比率になるように配分しました。ペットボトル飲料については生協に借りたコップに注いで飲んでもらうようにしました。コップの数は170個で、偶然8:00時点の総避難者数と一致したため、不足しているとの声は聞かれませんでした。

どの教室等でも、飲料・食料共に余りました。12:00頃に一旦全ての避難者には体育館に移動してもらうことになっていましたので、余剰分は体育館に運びました。

## 避難所のように

全教棟には、原則学生のみが避難することになっていたため、大きな混乱は無く、また、対応不可能な要望等があがってくることもありませんでした。全体としては落ち着いている印象でした。

志法会のボランティア有志は、1、2年生が多く、ボランティアが精神的負担とならないかが心配されましたが、よく協力してくれました。避難者数の集計が深夜から早朝にかけてであったこと、1時間毎に集計していたことから、疲労がみられ、交代で仮眠を取っていました。一部では配置された2名が共に寝てしまい集計が滞りましたが、そのままにし、志法会員で補いました。

8:00の配給を以て、全教棟における有志のボランティアを打ち切ったため、その場で解散となりましたが、他に手伝うことはないかと声をかけてくれる有志も複数人いました。

## こうして欲しかった

全教棟内の放送設備を使えるようにしていただくことはできないでしょうか。今回の避難時には特段必要とする事由は起きませんでした。強い余震や津波の際には、避難者を屋外に又は上階に移動させることにしていました。各教室等に配置したボランティアには避難の経路や順序等を指示していましたが、緊急の際には放送設備を使用できれば誘導しやすいと思います。

法学部 志法会

## Interview 振り返りインタビュー

Q. 全学教育棟の避難者のようすはどうでしたか？

一度重なる余震により十分な睡眠が取れていないと思われる避難者も多く、就寝時間に小声で会話をし、スマートフォンを使用する、喫煙する、自販機に飲料を買いに行くなどの行動が目立ちました。防犯上の理由から、単独での行動は控えてほしいとアナウンスはしていましたが、一人で避難して来ている方もいるでしょうし、皆が大きなストレスを抱えていらつしやることは分かっていたので、強制はしませんでした。



大塚卓嗣 (おおつかたくい)  
元法学部志法会。大学院社会文化科学研究科博士前期課程2年。

Q. ボランティアにあたった志法会メンバーのようすは？

4月14日の発災後から引き続きボランティア活動をしている者も多く、疲労が見られるメンバーもいました。彼らの顔を見ていると、休憩を取ることが重要だと実感しました(→23ページ「ボランティアの休息の重要性」)。しかし、強い使命感を持って取り組んでいたという印象を受けましたし、気の知れた者同士で行動を共にすることで、自分の気を紛らわすことができたと話していたメンバーもいたので、志法会としてボランティア活動にあたったことはとても良かったと感じています。

## 小体育館

避難所としては開放せず、多いときで数百人いた学生ボランティアが交代で休憩を取る部屋として使われました。



熊本大学黒髪体育館 見取図

# 第3部 未来へ伝えたいこと

ここでは、避難所運営に携わった学生たちが感じたこと、未来の大学や行政、学生たちに伝えたいことを紹介します。

# 学生対談「熊本地震、そのとき私は」

# 学生からこれだけは言いたい!

人間関係

情報発信

行政の対応

大学の対応

熊本大学黒髪キャンパスの避難所は学生が運営しましたが、運営した彼らだから感じたこと、思ったことが数多く存在します。それらに対談形式でまとめました。

※本対談は学生へのアンケートをもとに構成した仮想の対談です。登場人物は架空のもので、実在する人物ではありません。

## 日頃からの人間関係の構築が大切

**Aさん(以下、A):** 4月14日の地震が起こってからすぐに大学へ行きました。ひとりで停電した家にいるのは怖かったですし、友人たちと一緒にいた方が安全だと思ったから。

**Bさん(以下、B):** 生まれて初めて、大げさではなく生命の危機を感じて怖かった。

**Cさん(以下、C):** 東日本大震災のときに、情報が錯綜しているのをインターネットで見てたので、SNSはあまり見ないほうが良いと思ったけど、電話もつながりにくい中、やっぱり友人とのSNSのやり取りはとても励みになった。

**Dさん(以下、D):** 日頃からの人間関係の構築って大事だと心から思った。友人が一番ありがたかった。

**Eさん(以下、E):** 私は留学生なんですが、何も情報がなくどこに避難していいのかわからず、近所の人々が近くの中学校へ避難するというので自分もそこに行きました。日頃から近所の人と顔見知りになるのは、こういうとき役に立つんだと知りました。

**A:** いつも何かで一緒に活動しているグループ、例えばサークルとか部活とか、学科の集まりとか、既存の団体がいち早く活躍していて、そういうつながりも大事だなと。

**C:** 情報の共有もできますしね。

**B:** 大学に行って、信頼できる友達だけでグラウンドに集まったけど、やっぱりというか、パニック寸前になっている人もいたんで、なるべく流されないように、不安が伝染しないように、なるべく冷静に黙っているようにしていました。

**D:** ライオンが逃げたとか、ショッピングセンターが燃えているとか、デマが流れましたよね…

**A:** 普通のときなら信じないようなデマでも、混乱しているときにはすぐに信じてしまうというのを目の当たりにした。

**D:** 正しい情報が分からなくてそれが一番困った。嘘の情報もあり、天気予報ですらどれが本当かわからなくて。

**C:** 災害時はSNSのメリットとデメリットを肌で感じました。だからといってないと困りますし、難しい。とにかく「落ち着け!自分!」と言い聞かせていました。

## 大学の公式サイトに早く情報を出して欲しかった

**B:** 大学の公式はなかなか情報を出してくれないし、地元を離れている1年生はとて怖かったらと思うます。

**C:** それ、思った。大学はどうして公式のウェブサイトに情報を出してくれないんだろう<sup>1)</sup>ともやもやしていました。こんなときこそ、公式が頑張ってくれなかつた。

**A:** メールアドレスも把握しているはずだし、注意喚起のメールや、大学が避難場所になっていることだけでも流してくれれば安心できた部分があると思う。

**D:** 全学生の連絡先を把握しているのに、必要な情報を流せないなら何の意味もないと思いました。

**A:** グラウンドで学生支援部の人々が何かをアナウンスしてたけど、奥の方まで全然聞こえずブーイングでした。大学の事務局も混乱していたのは分かるけど、一斉放送を使うとか、緊急時の対応があまりにもなつていなかった感じがしたよね。

**B:** 緊急時のマニュアルはあるはずだと思うのですが、いったいどうなっているんだろうと思いました。

**C:** そういえば、休講のアナウンスが流れたときに、一部の学生が呑気に歓声をあげていてイラッとしてしまった。

**D:** でも今考えれば、ちょっとハイになっていたというか、怖かった裏返しで騒いでいたのかなと思うよ。

**B:** 確かに。でも指示が出ているときは、ひとごとではなくてちゃん

と話を聞いて一人ひとりが主体的に動かなければいけないよね。

**C:** それから、前震のあと、グラウンドに集まった学生に「もう地震は来ても震度3とか4だから帰ったほうが良い」と言っていた先生がいましたが、帰宅を促しているように受け取れてしまって、それはどうなのかなと思ってた。

**A:** 私もそれを聞いてたけど、「怖い人は残ってもいいけど」という言葉の後にそんな事を言っていたと覚えている。学生を安心させるためにそのような事を言ってくれたんだと思うけれど、中にはずっと泣いている子もいたし、先生の言葉は学生に与える影響が大きいため、発言にはもう少し配慮があつても良かったと思った。

**E:** 地震の直後から自分の奥さんと友人はあまりの恐怖にずっと泣いていてコントロールができていない状態だった。それでも家族と一緒に行動できたからよかったけれど、留学生で一人暮らしの人はかなり不安だったと思う。

**B:** やっぱ、大学は心の拠り所だったんです。だからこそ大学側にはしっかり対応して欲しかったというのが本音だよ。

## それでも大学は心の拠り所だった

**C:** 大学があつて、友人がいてよかったと思えました。大学に避難してみんなに会えたとき、もう大丈夫だ!と思って泣きそうになった。実家に帰る手段もなかったです。

**A:** 交通網がどうなっているのかもわからなかった。帰省できる人はした方がいいと思ったけど、二次災害もあるので、むやみに動くのも危ないし、タイミングを見極めるのが難しかった。

**E:** 海外にいる家族に無事を知らせるにもWi-Fiがなく連絡ができなかつたので、電話で大阪や東京にいる友人に連絡をして、そこから海外に知らせてもらっていました。

**C:** 海外との連絡は大変でしたよね、自分が海外に留学しているときにこんな災害にあつたらパニックになりますよ…

**D:** マスコミは被害状況だけではなく、避難所の情報や、被災者が何をしたらいいのかの報道も、もっとして欲しかったですね。ヘリコプターの音がうるさいわりに、大事なことは教えてくれない。あの時は、被災地以外のための報道、という感じがした。東日本大震災のときもそうだったのかなと思った。

**B:** 熊大が正式な避難所になってから、メディアの取材もいくつかあつたけど、正直面倒くさかつた。

**E:** とにかく英語の情報がなく、大学にこのままいていいのかわからなくて、大使館に連絡したら、大学の避難所が一番安全なはずだといわれて、ようやく少し安心したんです。

## 熊大は避難所ではない!?

**D:** 熊大は指定避難所に指定されていない<sup>2)</sup>ということを知りました。

**B:** ほんとそう、違うんだ!とびっくりしました。指定されていない理由があるんだろうけど、大人数を収容できる施設がたく

さんあるのだから指定されるべきだと思う。

**D:** 私もそう思う。でも、実際に大学を頼ってたくさんの人が集まってきたわけだから、避難所に指定されているかどうかは重要ではなくて、困っている人に何をしてあげられるかを大学を挙げて考えることが大事なんじゃないかと。実際、私たちはそれを一番考えて行動したわけだし。

**A:** 他にも地震が来て初めて知ったことは多いよね。

**C:** 例えば熊大は井戸水だった<sup>3)</sup>んだよね、だから断水しなかつた。でもその水がそのまま飲めるかは大学もわからなかつたから、近所から水を汲みにきた人に聞かれて困っちゃつた。

**B:** 体育館を開放して、熊大が正式に避難所になることが決まって、手探りで避難所を開設しました。でも、はっきり言って、学生に運営をまかせつきりだつた。

**A:** 有志が集つたのだし、自分にできることは何でもしようという気持ちだつたけど、せめて大学側には的確な指示を出して欲しかった。いろんなことにおいて誰が責任者なのかさっぱりわからなかつたから。

**C:** だよ。その中でも大学職員の方で初期からずっと寄り添って一緒に活動してくれた方はいて、本当に心強かつた。

**B:** 後から聞いた話だけど、自ら進んで来てくれた職員の方もいたみたいだよ。でも、それでも運営に関わってくれた職員の方の数が圧倒的に少なかつた気がする。

**D:** 私たちが避難所運営を大学へ託した18日以降は当番で来てくれてたし、職員の方もいろんな対応に追われてたろうから難しいところだけど…。それでも発災当初は学生だけの運営で心細かつたのはあるし、大学も学生や善意の人に頼ることなく、動くべき人が素早く行動する初動体制をしっかり整えるべきだよ。

**B:** 学生はいろんな子がすぐに動いてくれたよね。怖かつただろうに入学したばかりの1年生が避難所の手伝いを買って出てくれて、自分も頑張らなきゃと思えた。

**A:** 何もしないで怯えているよりも、何か役割があつた方が、気が紛れるというのはあつた。もちろん余力があればの話だけど、避難所の運営を手伝うことで救われた人はいると思う。

## 非常時だからこそマニュアルに基づいた判断を

**C:** 付近の高校に熊大生が溢れてたので、16日に熊大生だけでも余裕のある黒髪キャンパスへ移動させようとしたんだけど、学生支援部から「誰がそんな許可したのか」「高校から連絡が来ていないので、すぐには対応できない」と言われてしまった。学生を移動させたかただけなのに、突然責任問題を出されて怒られた<sup>4)</sup>のは理解できなかった。

**A:** 他にも、16日の昼ぐらいから体育館の人が溢れて、他の建物を探していたとき、比較的新しい図書館が候補に挙がつたんですが、最終的には断られてしまって。本が散乱しているという理由からだつたんだけど、1階にはスペースがあるし、

ちゃんと納得するように説明して欲しかったです。

**D:** 短い時間で決断しなければいけないときもあったらどうか情報共有が上手くいってなかったよね。非常時こそ冷静な判断ができないのは当たり前だから、避難スペースの確保など**しっかりとしたマニュアルを大学が持つべきだと思う。**

**B:** 少し話は逸れるけど、備蓄倉庫の場所を知らない職員の方がいたのは問題。こういったところもマニュアルに入れて欲しいし、**ただ作るだけでなく、みんながそのマニュアルで予め勉強しておくことも重要。**

## 行政に求めたいこと

**B:** 大学のマニュアルもそうだけど、行政の対応にも疑問を感じました。ちょうど物資が届いて学生がバタバタしているときに、では定時なので帰りますといわれてびっくりした…

**C:** 熊本市の対応が全く分かっていない方が来て、これを市役所へ確認してください、とお願したにも関わらず、連絡してくれなかった。分からないならそう言ってあげればいいのに、報告もなかったのは参った。

**B:** しかもその方の後に来られた市役所の方に引継ぎもせずじまいでしたよね。全体ミーティングの最後にみんなで役割を確認したりして工夫したけど、それでも駄目だった。

**D:** みんな行政の方への意見が厳しいね(笑)。もちろんそうではない市役所職員の方もいたし、県外から応援に来られた行政職員の方はとても動きが早く対応が良かった。私は勉強になったし、ありがたかったです。

**A:** 言われている行政の方々も突然被災したわけだから、心身ともに大きな負担がかかっていたと思うし、完璧な対応は難しかったかもね。特に市の災害対策本部との連絡調整はすごく大変だったんじゃない？

**C:** それは分かるけどね、**市役所から来ているからには災害対策本部とのパイプ役として機能して欲しかった。**今回を経験して、情報を災害対策本部に上げる、本部は現場の情報をきちんと管理する、この2点は特に重要だと思ったよ。

**B:** まさにその通り。これは私たちにも言えることだけど、これを教訓にきちんと災害に対する訓練を行って、特に行政の方には避難所運営についてアドバイスしてくれるような頼れる人たちになってほしいと思った。

## 避難者の対応にも困ることがたくさん

**D:** ボランティアとして避難所運営をしていた学生も同じく被災者なのに、他の避難者から精神的圧迫を受けている場面を何度も見た。学生も不安を感じながらの動きだったから、身体ももちろんだけれど心労がひどかった。

**C:** **高齢の方から理不尽なクレームをつけられて、精神的に辛かったです。**東日本大震災のデータを活かしていないだとか政治や宗教のこととか、命令口調でまくし立てられました。

**D:** コンセントの場所について文句を言われたときにはどうしてろってんだと思いました…

**B:** 物資が少ないと文句を言われたりもしたよね。

**A:** 避難者のほとんどはとても協力的な人たちだったから、そういう方がどうしても目立ってしまうというのはある。ただ、少し迷惑な避難者ならまだ対応の仕方があるけど、不審者が出たときはもう手に負えなかった。

**D:** クルマを覗く人とか物資を売りつけに来る人とか、いたね…

## もう二度と起こって欲しくないけれど

**C:** もう地震はこりこりだけど、今回の地震で今まで見えなかったことが見えた。友人のありがたさとか、周囲からの支援とか、嫌なことも多かつたとはいえ、嬉しいことも多かつた。

**B:** グラウンドに避難して来たとき、学生の動き出しがとても早いの感動した。懸命に避難者のお世話をし、何か自分に出来ることはないかと周り協力して臨機応変に対応しているのを見て、**この大学に入学してよかったと、将来も胸を張って言えると思いました。**

**D:** こんな体験をしたのだから、世界中どこで災害が起こっても他人事には思えなくなりますね。この経験を何かに活かしたい。

**E:** あの地震がきっかけで、友人になった人とは今も連絡を取り合っています。また何か災害が起こっても、彼らと一緒に困難を乗り越えられると思います。

**A:** もう二度とこんなことは起こって欲しくないけれど、もしも起こってしまったときに、**後輩たちにわたしたちと同じ苦勞は絶対にさせたくない、それは本当に思う。**

1) 担当の熊本大学広報戦略室に取材しました。「大学のWebサーバがある工学部1号館が大きく被災し、システム障害により、熊本公式ウェブサイトでの更新が一時不可能な状態になりました(4月16日の地震発生から16日15時30分まで更新不可能な状態)。学生の皆さんには大きな不安を与えてしまい大変申し訳なく思っています」とのことでした。

2) 黒髪キャンパスでは、グラウンドが地震時の「指定緊急避難場所(一時避難場所)」に指定されています。

3) 黒髪キャンパスは地下水を貯水槽にくみ上げ、それを水道水等として供給するシステムを採用しています。よって、熊本市のほぼ全域が断水した4月16日の発災後も黒髪避難所の水道が断水することはありませんでした。ただし水質の安全が確認できなかったため、飲用での使用は原則不可としました。

4) 学生支援部に取材しました。「当時は混乱した状況で、受け入れるとすれば大学にも責任がありますので、それを大学側へきちんと確認してほしいというような意味で言ったと記憶していますが、こちらの思いをうまく伝えられなかったのだと思います。学生と大学の意思疎通が上手くいっていなかったとしたら、それは今後の課題だと考えます」とのことでした。

熊本地震では、熊本大学黒髪北キャンパスは、避難所ではなく緊急避難場所として指定されているだけであつたが、避難者の多さのために体育館を避難所(以下、「熊大黒髪避難所」とする)として開放し、そこではたくさんの学生が活躍した。本書の最後では、熊大黒髪避難所の経験から、避難所運営のあり方、そして災害時に地域に貢献をしたいと考える学生が活躍できるシステム作りについて行政及び大学に提言する。

## 1. 熊本地震における避難所運営の課題

熊大黒髪避難所において生じた問題点は、以下の通りである。

- ・まず、行政や大学が、災害認識の甘さから、対策が不十分で非常時対応に混乱していた。
- ・次に、何かできることをしたいと学生達が集まった結果、学生中心の避難所運営へという流れになったが、学生がどの程度まで判断して良いか分からず、運営のノウハウもなかった。
- ・その結果、行政や大学と学生との間で、情報共有がうまくできず、その連携不足が課題となった。

## 2. 避難者主体の避難所運営

前提として、避難者が主体となってその協力のもとで避難所の運営体制を構築することが最も重要である。もちろん多くの支援が必要とはなるが、あくまでもそこでの生活は避難者自身の事柄・問題であり、避難者自身の主体的な姿勢が不可欠である。したがって、避難所運営のあり方も含めた、災害時に備えた情報を住民に提供し、地域として日頃からの備えが必要となる。

それを踏まえた上で、行政・大学の役割について述べる。

## 3. 行政の役割

まず、最も重要な行政の役割とは情報管理である。避難所を運営する住民等(以下、「運営スタッフ」とする)への情報提供を行い、行政職員は、災害対策本部と各避難所をつなぐパイプ役として積極的な役割が求められる。

例えば、行政職員が避難所運営のノウハウについて、マニュアルに基づいて運営スタッフにアドバイスすることだ。避難所について必要な役割は多岐にわたる。積極的に避難所運営に関わろうという意志があっても、それが初めての経験であるという人は多い。行政職員がそのアドバイスをできるようにすれば、運営スタッフの負担も大幅に減る。

また、各避難所における避難者・物資の数は、行政の災害対策本部が正式な情報として把握しておくべきだ。行政職員が運営スタッフに避難者・物資の数の把握が重要であることをアドバイスし、運営スタッフが行政職員に避難者数及び足りない物資数を伝える。そして、行政職員が災害対策本部へとその情報を伝えることで、どの避難所に物資が本当に足りないか、正式な情報として災害対策本部が把握できる。そうすれば、物資の分配もよりスムーズになり、SNS等による情報の錯綜への対策にもなるはずだ。近年発達の目覚ましいSNSは、それを上手く活用して情報収集・管理をおこなうべきである。

## 4. 大学の役割

次に、総合大学としての熊本大学の役割である。電気水道のライフラインが遮断されることもなく、緊急に避難所として開放できたことや、学生達が地域のために多大に活動したことを踏まえると、大学は避難施設として非常に有用だと判明した。熊本大学周辺には高齢者ばかりの避難所も多々あつた。一方、熊大黒髪避難所では、ボランティアへ名乗り出た学生を断る時もあったほど若い人材が溢れていた。しかし、当時はどの避難所に人が足りていないか情報に乏しかった。熊本大学が災害時に果たせる役割の大きさを考慮すると、大学周辺地域だからこそできる災害対策システムが構築できるはずである。その際、最も重要なのは、学校など避難所となりうる施設との連携である。もちろん、避難所全体としての情報は行政が管理するべきであるが、大学も周辺地域における「司令塔」的役割が果たせるのではないかと考える。

また、避難所運営においては、指示をもとに実際に行動するライン機能と、集められた情報を分析・判断するスタッフ機能の区別がとても重要となる。災害時に学生が果たせる役割は大きいと、熊本地震で認識した。各々の専門性を活かし、個性豊かな学生達が縦横無尽に連携できたことは素晴らしく、そこから避難所運営に関する様々なアイデアがたくさん生まれた。これは学部学科が多い総合大学の大きな強みであり、その結果、熊大黒髪避難所は比較的快適な避難所となったといえる。一方で、「学生ありき」の避難所であつた結果、学生達が重要な各局面で判断・決断をせざるを得なかった。その役割は、施設管理者であり、避難所運営の責任者たる大学が担うべきである。将来同様の震災が起こった時、もし同様に避難所運営活動に関わってくれる学生達がいたら、私たちはその後輩達にそのような重責に苦悩して欲しくない。学生の力は実際に行動してこそ生きるものであるから、大学はスタッフ機能の体制を整えつつ、ライン機能の中で「若い力」に溢れる学生を活用すべきだ。そうすれば、再び災害に直面したときも、大学を挙げて一致団結することで困難を乗り越えられるだろう。

## 5. まとめ

災害時避難所運営において、最も重要なことは情報を得ることであり、あとはそれに基づいて的確に判断し行動に移せるかである。情報管理は行政が行い、大学も避難所+αとして、地域の拠点になる能力が備わっており、地域貢献したいと思っている学生もたくさんいる。それを踏まえて、避難所運営のあり方の見直しや災害時に学生が活躍できるシステム作りに取り掛かるべきである。また、この貴重な経験から学んだことを、様々な形で後輩たちに伝えていくことが重要であり、それが学生の役割でもあると考える。

発災直後から、各機関や各避難所、そこにいる人々の連携が深まっていれば、次段階である「復興」への移行がよりスムーズになるはずだ。















# 物資受入表（生活用品等）



枚目

① 受入日	② 種類	③ 品名	④ 備考	⑥ 個数	⑦ 対応した人
(例)	生活用品	トイレトペーパー	一部バラで受け入れたもの あり（早めに消化）	50 ロール	熊大太郎
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					

① 受入日時	② 年齢	③ 性別	④ 症状	⑤ 処置・対応	⑥ 保健センターへの連絡	⑦ 初診再来	⑧ 対応した人
(例)	50代	男	頭痛、吐き気、高熱、悪寒	インフルエンザの疑いあり。保健センターへ連絡。	有	初	熊大太郎
月 日 時 分	代	男 女			有 無	初 再	
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							
月 日							



枚目

① 受入日時	② 年齢	③ 性別	④ 症状	⑤ 処置・対応	⑥ 保健C への連絡	⑦ 初診再来	⑧ 対応した人
(例)	50代	男	頭痛、吐き気、高熱、悪寒	インフルの疑いあり。保健セータへ連絡。	有	初	熊大太郎
月 時	代	男 女			有 無	初 再	
月							
月							
月							
日							
日							

## 編集後記

まず今回冊子を作成するにあたって、ご協力いただいた方々には感謝いたします。特に震災発生当初からこの冊子が完成するまで一緒に活動して下さった諸先生方、本当にありがとうございました。

この冊子は、熊本震災の時に熊本大学黒髪キャンパス体育館で避難所運営を行っていたメンバーを中心として作成されたものです。当時の記録や思い、後輩たちに向けたメッセージを載せています。この冊子が少しでも今後の役に立つてくれたらと思います。

震災発生直後、私を含め多くの方々がパニックに陥ったことと思います。不安な日々が続いたと思います。地震発生時、私は会議の最中だったのですが、地震だと理解し机の下に隠れるなどすぐに行動できたのは50人中3人程でした。私自身理解が追いつかず、揺れが収まるまでは一っとして立っていました。それくらい日常では考えられないような揺れでした。その後、本冊子にあるような経緯で学生団体が結成されました。何もかもが手探り状態で不安と疲労でいっぱいだった状態でした。この416の振り返り会議は、そのような経験から「もしも同じことが起きて大丈夫のように」「二度と同じ失敗は繰り返さないように」という想いから始まりました。避難所解散の翌日の第1回の振り返り会議では、途中で全員寝てしまい、昼に始めたはずがいつの間にか夕方になっていたということもありました。どんなものがあればもっとスムーズにできたのか、スタッフの負担を減らせたのかなどを考えながら作った一冊です。本冊子を手にとってくださる方の中には、実際に今避難所で見ている方もいらっしゃると思います。そういう状態でもすぐに使えるようなものになっています。何かしらの形で、皆様のお役に立っていることを願っています。

最後に、時間が経つとともに忘れかけられている災害の痕はまだたくさん残っています。多くの方々が復興に向けて頑張っています。それらの地域が一日でも早く復興できることを心から願っています。

2017年1月18日 柴田昌樹  
(生協組織部 / 理学部)

### "416" 編集委員会 コアメンバー

新垣匠 (生協組織部 / 文学部)、新垣陽一 (第五回紫熊祭実行委員会副委員長 / 工学部)、一宮愛菜 (第五回紫熊祭実行委員会 / 理学部)、衛藤豊 (第五回紫熊祭実行委員会委員長 / 教育学部)、太田七海 (生協組織部 / 教育学部)、大塚卓嗣 (志法会 / 大学院社会文化科学研究科)、尾花竜生 (生協組織部 / 文学部)、甲斐奎佑 (教育学部生涯スポーツ福祉課程)、小大塚健次郎 (生協組織部 / 工学部)、柴田昌樹 (生協組織部 / 理学部)、庄野智之 (志法会 / 法学部)、高瀬大丞 (志法会 / 法学部)、千代丸彩夏 (生協組織部 / 文学部)、宮城育穂 (医学部保健学科看護学専攻)、山崎十和子 (生協組織部 / 文学部)、山崎皆実 (体育会第57代幹事長 / 理学部)、横矢萌 (生協組織部 / 工学部)、その他編集にご協力頂いた皆様

(以上、50音順)

# 416

私たちがやったこと、未来へ伝えたいこと

平成28年熊本地震 熊大黒髪避難所運営記録集

平成29年3月発行

発行："416" 編集委員会

熊本大学紫熊祭実行委員会 / 体育会 / 生協組織部 / 法学部志法会 / 教育学部生涯スポーツ福祉課程 / 医学部保健学科看護学専攻 / その他学生ボランティア有志一同

協力：熊本大学復興支援プロジェクト (復興ボランティア活動支援プロジェクト) / 地域創生推進室 /

政策創造研究教育センター / 保健センター / 熊本大学生協同組合 / その他取材へご協力頂いた皆様



◀ Kumamoto University